指先の距離
（超近距離射程）

3.11シリーズ　Ⅷ－１
＜レンジ：第１話＞

咲.

《　超近距離射程　～指先の距離～　》

「ただいまぁー！」
ボクは玄関の扉をあけ、声をあげた。
鍵をあけて入ったのだから、中に、誰も居ないのはわかっていた。
母は、この時刻はまだ仕事…で、家には帰ってこられない、はず…。

それでも…幼い頃からの習慣はボクに、毎日の再確認を、繰り返させるのだった。

初夏の日差しで暖められた室内は、早朝まで降り続いていた雨と、部屋干しされた洗濯物の湿気を閉じ込めて…ムッとする空気で充満していた。
「また、風呂場の換気扇だけにして、出たのかぁ…かあさん、てばぁ…」
小さな庭に面した居間の窓をあけると、土の匂いのする風が、ヌルリ…と、足元から入ってくる。
ボクは台所へいき、換気扇を回した。
冷蔵庫から牛乳のパックを取り出し、コップに注いで一気に飲み干す。
一息つくと、居間に放った布バッグから、汚れた部活のユニホームを引っ張り出して、洗濯機に放り込んだ。

洗濯機の回る音を合図にして、庭の隅から、クウゥゥンキュンキュン…と、鼻を鳴らす音が聞こえてくる。
居間の窓からボクは身を乗り出すと、パタパタと尻尾を振る柴犬の”K”に声をかけた。
「ちょい待ち、着替えてくるから…」
奥の突当りにある自分の部屋に入り、制服を脱いで、チノパンとパーカーに着替えると、居間の窓に再び鍵をかける。仏壇の、父の写真に手を合わせ、台所の収納ボックスから、ゴミ袋用に溜めてあるスーパーの袋を二枚取り出して、チノパンのポケットにねじ込み、玄関へいきかけ…て…。
「おおっとぉ…」

自室に戻ったボクは、机上の軟式のテニスボールを手に取り、右手の人差し指と中指の間に、挟みこんだ。

フォークボールは、肘や肩にかかる負担が大きいから…と、中学校の部活では、投げるのはおろか、練習することも禁止されていた、が…高校に進学するまでにもっと…ボクは、球種を増やしておきたかった。

…が…思うように開かない指に……ため息をつく。
握力を鍛えるために、右手の中で、テニスボールを握りつぶす動作を繰り返しつつ、玄関を出る。
扉に鍵をかけ、庭に回ると…”K”が後足で立ち、手招きしながらボクを待っていた。

父は、昨年…横断歩道上で、信号無視の車に跳ねられ、死亡した。
心臓発作で運転手が意識を失い、車が暴走して…の事故、だった。

四十九日が過ぎると、母は、ボクの出産を機に辞めていた、保育士の仕事に復帰した。
父の保険金等々は、ボクの大学までの学費にキープして…今後の生活費は、ワタシが稼ぐっっ！…と、母は息巻いていた、が…、働いて、気を紛らわせたい…ってのが、本音のように、ボクには思えた。
基本給がいいからと…新年度からは、午後から出勤の、夜遅くまでのシフトを、母は選んでいた。

「いずれは…フル出勤の、正職員を目指す…かぁ…」
新年度になるまでは、母がやっていた”K”の散歩…。
…散歩から帰ったら、かあさんが午前中に洗って干した、洗濯物を取り込んで…畳んで仕舞って、それから風呂場を掃除して……ああ…野球部のユニフォームも、忘れずに、干しとかない、と……。

前方の、曲がり角の奥から…車の近づいてくる音が、聞こえてきた。
ボクは、Ｔ字路の角で引き綱を引き、”K”を止まらせる。
案の定…細い路地から車が飛び出し、一時停止の停止線を乗り越え…急停止をする。
運転手は一瞬、ボクの方を見た…が、さして気に留める様子もなく、急発進で角を曲がる。…と、スピードを上げ、走り去っていった。

車の飛び出しに、驚いたわけではない、のに…心臓が激しく脈打ち、ボクは息が、苦しくなる。
…叫びたい衝動が、咽喉の奥から湧き上がってくる…。

うつむき、息を止め…ボクは、唇を噛み締めた。

人通りの多い住宅街を抜け、小高くなった河川沿いの遊歩道に出ると、ボクは、左手の中に畳み込んでいた引き綱を緩めた。”K”は、自由になった綱の距離いっぱいを駆け、ホグホグと、遊歩道脇の草むらや地面の、匂いを嗅いで回る。
足早だった散歩のペースは緩くなり、ときに止まりながら…初夏の夕暮れ時が、過ぎていく。

傾いた太陽光を反射し、キラキラと光る川面を眺めながらボクは、深呼吸をした。
朝の雨のなごり、か…いつもより、青草の香りを強く含んだ風が、心地よい。
アスファルトで舗装された遊歩道の脇の、むき出しになった地面は、まだ、乾ききっておらず…湿り気を帯びて、足裏に柔らかかった。
その地面の上を、クルクルと小回りをしていた”K”が、意を決して腰を落とす。
「…いつもより、早いんでないのぉ…」
真剣な顔で、自然現象を地面に投下中の”K”に話しかけながら、ボクは、チノパンのポケットからスーパーの袋を引っ張り出し、腰を屈めた。

「そのへんの土…あんま触んないほうがイイかも、ヨ」
突然、頭上から降ってきた聞き慣れない男の声に、ボクは、顔を上げた。

ほとんど毎日の散歩…その途中で行き違う人と挨拶を交わすのは、当たり前になっていた。
顔なじみになって…短い会話を交わす相手も何人か、いる。
だから、背後から近づいてくる足音にボクは、気を留めてはいなかった。
頭上に覆いかぶさる男の影に驚いて、バランスを崩し…ボクは、尻餅をつきそうになる。
背後に伸ばし、地面についた両腕では、身体を支えきれず、に…さらに後方へと倒れこむ。…その背中を、男の左腕が押し支えた。

「大丈夫？」
背後から、脇の下に通された男の両腕が、力強くボクの身体を引き起こした。
ボクの胸の前で、男の右手に掴まれたタブレットＰＣの、画面に表示された数字が、切り替わる。
画面に気を取られ、握りのゆるんだ左手から、引き綱が抜け…”K”が、前方へと走り去っていった。
「あ…こら！”K”…ま…っっっ？！」
後方に腕を引かれ、振り返る、と…タブレットＰＣと、男の肩に提げられたショルダーポーチとをつないだ、ＵＳＢケーブルが…ボクの腕に、からまっていた。
「ごっ…ごめ…！動か…ないでえぇ…！！」

目を大きく見開いた男が、咽喉に詰まった悲鳴を、あげた。

「借り物なんで、これ…高いの…壊れたらオレ…払えない……」
ウェーブのかかった短い髪、日焼けした肌の、屈強そうな男が…情けない声でつぶやきながら、用心深く、ケーブルのからまりを解いていく。
長袖のＴシャツにジーンズ、年季の入ったスニーカー…首に巻いた方言プリントの手ぬぐいは、オシャレなのか冗談なのか…。
大学生？いや、もう少し年上…かな？

「なんですか、それ…」
ボクは興味を抱き、男の手中のタブレットを覗き込んだ。
「…イヌ…」
ケーブルを解放した男の目は…遊歩道から河岸に続く、青草の斜面を下り、河川敷の、開けた平地を走り回る”Ｋ”の姿を、不安そうに追っていた。
「あぁ…大丈夫です…時々、あの辺りでリード外して、アイツ…走らせてます、から…」
ボクは膝をつき、”Ｋ”の落し物を、スーパーの袋で摘み取りながら、答えた。

袋の口をひねって閉じ、もう一枚準備していた袋にそれを入れ、立ち上がると、ボクは男と対峙した。
男の、色の薄い瞳が、袋をじっと見つめている。
……？
ボクは…袋を、男に向かって差し出してみた。
男も黙って、ポーチを、それに近づける。
タブレット画面に表示された数値が、数ポイント上がり…だがすぐに、前の数値に戻って、落ち着いた。
真剣な顔で、画面を睨んでいた男が、ホッと…息をつく。

「なんですか、これ…」
指差して…二度目の、問いかけ。
「『ホット･スポット･ファインダー』……え…っとおぉ……」
男は答えかけ…タブレットの画面から視線を上げる、と。
「Ｆｏｌｌｏｗ　Ｍｅ！」
綺麗な発音、だった。
”Ｋ”が駆けていった河川敷へ…と、男は、スタスタと歩を進める。
遊歩道の脇に置いていた、テニスボールを拾い上げるとボクは…彼の背を、足早に追いかけた。

河川敷の平地へと続く斜面を、彼の前に立ち、下りていく。
「テニス部？」
彼が、尋ねてきた。
ボクは、テニスボールを右手の人差し指と中指の間に挟みこみ、フォークボールの握りをして見せる。
「ああ…野球、ピッチャーかぁ…！」
そう言うと彼は、ボクを追い抜き、平地までゆっくりと駆け下りる、と…「オ、レ、はぁ…！」…と、右足で小石を蹴り上げた。カーブを描いた弾道は、遠く川面まで伸びていき、落下して、水しぶきをあげる。

「サッカー、やってるんですか…大学で？」
ボクは、ちょっとだけ…サバを読んだつもり…だった。
「いや…怪我しちまって、さ…サッカーは高校まで…で…大学、は……」
口が止まり、数秒の間…彼は、クツクツと笑い出した。
「大学で、やってる…って…オレ…もう三十路なんだ、けど……だ…大学生は…いくらなんでも、無理、が、ある…っ…」
…え？
三十代…って…死んだオヤジと彼は、あんま違わない、歳……？

呆気に取られたボクの足元に、”K”が、駆け寄ってきた。
引き綱を外し、ボクはテニスボールを投げる。
「まだ子犬…かな？」
「…たぶん…」
父と同年代だと、知ったからだろうか…初対面の相手にボクは、話を続けていた。
「去年…二人暮しは物騒だからって、かあさんがショップから買ってきて…。なんか変、ですよね…。それまではオヤジ…父が、出張で家を空けてても、なんとも無かったのに……死んで居なくなったら急に、怖いだ、なんて……」
ボールは、小石にでも当たったのか、思わぬ方向に弾み…数十メートル先の、茂みの中に飛び込んだ。
後を追った”K”の姿も、背の高い草に隠れ…見えなくなってしまった…。

測定をしながら”K”が消えた茂みに向かって、ボクたちは歩き出した。
タブレット画面の数値を視ながら、河岸敷きの斜面と平地との、境目あたりを選び、進んでいく。

彼の右肩に提げられたポーチには、放射線の検出器が入っていた。
数秒ごとに更新される線量は、ケーブルでつながるタブレットＰＣに、数値とグラフで表示され、記録されていく。

タブレットの画面には、現在地の地図も、同時に表示されていた。
「『スペクトル表示モード』ってのもある、けど…本格的な線量測定はオレ、始めてだから…読むの、自信ないわ…」
田植えが終わったんで、ボランティアで…放射線量マップ作りの手伝いにきているんだ、と…彼は言い、農家に弟子入りするまでは、放浪ばっかしてたから…歩くだけなら、丸一日でも平気なんだけど、頭使うのはなぁ…と、しかめっ面をして見せた。

苔や草の生えた辺りや、水が溜まりやすい、窪んだ地形のそばに立つ、と…数値が上がる場所が、あった。
そんな時は、肩から検出器を下ろし、地表近くの線量も、測ってみる。
「雨水が流れ着く所には、降下物も集まってくるから…高い数値が出る場合があるの、な…。
あと、草なんかが生えてると、雨や風で表土が移動しない…てか、逆に、降下物が吹き溜まっちゃう可能性も、高くなる、し…生物濃縮も、考えられるの、かなぁ…」

３．１１以降…ボクの家族もしばらくは、放射能のことを話題にしては、いた。
ボクも父も、あまり、気にしなかった、が…母は、食べ物や飲料水を、選んで買うようになっていた。
「あの…半減期ってのを過ぎると、放射線の量は、半分になる…って…ニュースで…」
ボクが言う、と…。
「ん…セシウム１３４は半減期が２．１年だから、ね…。でも、セシウム１３７の半減期は３０．２年なんで、１３４と１３７が、同じ量だけここに存在すると仮定したら…トータルで線量が半分になる時期は、３年を過ぎてからになるんだよ…。６年で三分の一、１０年後でやっと、四分の一以下になる計算…かな」
放射線量の減衰割合は、年とともに、緩やかになっていくから…減りのスピードが減速する、これからが、測定の正念場なんだよ…と、彼は…口元を引き締めた。

新しい放射性物質が、まだ今も、壊れた原発から出続けている…って、先日、テレビで言っていたような……。ボクは、ふと…思い出した。
映画の中のワンシーンのように、そのニュースをボクは…実感もなく、観ていた。
それが、危険なのか…安全なのか…。自分に関係があるのか、遠い出来事なの、か……。

３．１１以降…漠然とした不安は、ボクの心の奥底でずっと…くすぶり続けていた…。

茂みが近くなると、少しずつ、放射線量の数値が上がり始めた。
地を這う芝草…まだらに生えた、ボクの膝丈くらいの草の株。その数メートル先で、茂みは急に密集し、草丈も一メートルを超える、一軒家ほどの大きさの藪に、なっていた。
その藪の奥で、地を擦るような、引っ掻くような音がする。
「”K”ィィー！！」
ボクが呼ぶと、息を潜めた沈黙が数秒続き…また、音がし始めた。
テニスボールを、捜しているのか…？
音のするほうへ数歩、草を踏み分けて進む、と…グニャっとした感触が、足裏に触れる。
足元からボクは、テニスボールを拾い上げた。

「おいおい…」
それじゃ、アイツは…何を掘り出そうとしているんだ？
奥に進もうとするボクの肩を、後から彼が、強く掴んだ。
「ここ…線量が高い…。オレが先に、いく…」

しだいに密度を増す、丈の高い茂みを掻き分けながら、奥へと進む。
突然、視界が…開けた。

藪の中…八畳ほどの、ポッカリと空に抜けた、空間…。
茂みが途切れた原因は、地面に散乱したゴミの山の所為…だった。
川の増水時に、流されてきたゴミが、ここに、集まってきたのだろうか…。ゴミは重なり、草を押し倒し、その成長を阻害していた。
だが…そこにあるのは、家庭ゴミだけではなかった。
ゴミの山の片端に転がる、冷蔵庫、エアコン、テレビ…布団、衣類、雑誌の束…。
あきらかな、不法投棄物、だった。

”K”は、一心不乱に、冷蔵庫の下を掘っていた。
地面と冷蔵庫との間に挟まった何かを、口に咥え引っ張り、首を振る。
「ここ…ヤバイわ！立入禁止区域並みの数値が出てる！早く、離れたほうがいい…！！」
タブレットの数値の桁が、遊歩道を測っていた時よりも一つ、上がっていた。
「”K”！！」ボクは、テニスボールを持つ手を前に伸ばし、左右に振ってみせる。
”K”が冷蔵庫から離れ、近づいてきた。…が…首輪に手を届かせるには、あと数歩分の隔たりを残し、ゴミの上に座り込む。

安易に近づくと…遊んでもらえると思っている”K”は、はしゃいで、逃げ回る可能性が高かった。
一か八か…ボクは、テニスボールを藪の外へと放り投げる。
「”K”！持ってこい！！」

弾かれたように、”K”が、ボールを追って、茂みから走り出ていった。

「キミも早く外へ…！オレは、この辺りの数値を記録して、出るから…」
促され、きびすを返そうとしたボクの視線は、冷蔵庫の下に挟まった物に…釘付けになった。
測定を始めた彼を押しのけ、ボクは前へと、走り出た。
そこにあったのは…野球帽のつば、だった。その、つばの裏側に、大きく書かれた文字…。
「…とうさん…」
それは…父が書いたボクの名前、だった。

父が出張先から買ってきてくれた、贔屓の球団の帽子…。だが、手渡された時すでに、そこには達筆だが無粋な文字が、デカデカと書き込まれていた。
「やめてよっ！小坊じゃないんだからさあぁ！！」
ボクが言う、と。
「友だちの中には、同じ球団のファンが何人もいるだろう？同じ帽子でも…これで間違えられずに済むだろうが…！」
父の、言い分だった。
案の定…その野球帽は、この河川敷で草野球をやってるときに、からかいの的となってしまった。
恥ずかしくなったボクは、試合中に、帽子を空へと投げ捨てた。
風にあおられ、遠くまで飛んだそれは、藪の中に落ち…試合終了後、みなが協力して探してくれたが、どうしても、見つからなかった。

父が事故に合ったのは、その、数日後…。

帽子のつばには、”K”の歯形が付いていた。
力を込めて引っ張ってみるが、つば以外は泥に埋まっている上に、冷蔵庫の重みが加わり…ビクともしない。
「何してる！早く外に…」
ボクの手元を覗き込んだ彼は、瞬時に状況を理解したらしく、ショルダーポーチを肩から下ろすと、タブレットと共に、ボクの手中に押し込んだ。

「これで、鼻と口を塞いで！」

渡された彼の手ぬぐいで顔を押さえ、ボクは、ゴミの山を周り、冷蔵庫から遠ざかった。
彼は両腕で、冷蔵庫をつかんで押し、揺さぶる。
冷蔵庫の天板や扉縁に溜まった粉塵が、パラパラと落ち、彼の周囲に舞った。
「くそっ…！」
飛び退いた彼はＴシャツを脱ぐと、シャツの生地で口元を押さえ…再び、冷蔵庫に近づいた。

踏み込んで前蹴りの…強烈な、一撃。
後へ倒れ込む冷蔵庫の下…泥に埋もれた野球帽を引っ張り出すと、ボクらは、土埃に追い立てられるように、茂みから走り出た。
テニスボールを咥えた”Ｋ”が、尾を振り、足元に駆け寄ってくる。
ボクは、タブレットと手ぬぐいを左脇に挟むと、膝をつき、左手のひらに巻きつけていた引き綱を解いて、”Ｋ”の首輪につないだ。
立ち上がったボクの、左手には引き綱と”Ｋ”とテニスボール…右手には、タブレットＰＣと方言手ぬぐい、そして、右肩から提げた、放射線検出器のポーチ…。

日常と非日常が、左右に分かれ、ボクの身体を…引き合っていた。

「あの、これ…」
ボクは、預かったタブレットを、彼に向かって差し出した。
同時に、野球帽を受け取ろうと、左手を伸ばす。
指先が、帽子に触れそうになった瞬間…彼は、帽子を持つ手を、後ろに引いた。
脱いだＴシャツで口元を覆ったまま…彼が、首を大きく横に振る。
キツく眉根を寄せた彼の目は、ボクの手元を見つめていた。

ボクは、手中のタブレットの画面に、視線を落とす。
画面の数値がさっきより、さらに…一桁、上がっていた。
ボクの指先は、野球帽に向かって伸ばされたまま、凍りついた…。

「…ウソ…遊歩道より、二桁も、高い……」
放射線量などには、ほとんど関心がなかったボクでも…この数値の急変には、焦りを感じた。
彼が数歩、後退さる、と…数値は、見るみる下がっていく。

Ｔシャツを放り投げ、彼が、川岸に向かって走り出した。
帽子を川へと、投げ捨てるつもりなんだ…ボクは、とっさにそう思った。
呆然とした身体は、制止の声を上げることもできずに、その場に止まっていた。

…だが彼は、水辺へと続くゆるい階段状のコンクリート斜面を駆け下りる、と…膝上まで、川の中へと入っていく。
野球帽が、水の中に沈められた。
川の水で、泥を洗い落とそうとしている…。ボクは、やっと…気がついた。

彼の後を追い、ボクも川へ入ろうと、水際へと走り寄る。
「来るなっっ！！」
彼は、振り向かず、ボクに背を向けたまま…声をあげた。
「来るな…この川の底質は汚れてる…。低いけれど…測れば、数値が出るんだ…」

そこにあるのは、震災以前と、なんら変わりのない、風景…。

川の何が、汚れてるって…？犬と遊ぶ、いつもの場所に…立入禁止区域……？
ボクは、混乱していた。
「そんな…だって……ただの泥…でしょ…。洗濯機で洗って…毎日、普通、に…」
恐れに硬直した身体とは、相矛盾する言葉が、口をつく。
彼の背中の動きが…止まった。

「かあさんが…また汚したの、って、小言を言って…それでも、いつも、キレイにしてくれて…。男なんだから、汚れるのはしょうがない…って、オヤジは、助けてくれ、て…」
手の中のタブレットが、重い。
遊歩道へ…いつもの日々へと戻ろうよ…と、”K”が引き綱を引き、ボクを急かしていた。

そうだね…全部ここに置いて、戻ろう…。

沈みかけた夕陽が川面に描く、黒い影に向かい、ボクは…口を開きかけた。
シルエットが、静かに背を伸ばし…腕を水中から引き上げる。
その手に握られた、ボクの、記憶の断片。
失いたくない過去から、容赦のない現実が…毒を含んだ水となって、滴り落ちていた。

ボクは顎をあげ、息を吸い込んだ。

「う…わああああぁぁぁーっっ！！」
腹の底から…押さえていた憤りが吐き出され、大気に拡散していく。

声に驚き、怯えた”K”が、ボクの背後で鼻を鳴らした。
川面の影が、ゆっくりと振り返る。
ボクは、その姿を見据え、両足に、力を込めた。
正面に立ち、ボクを見つめる彼の眼差しは、力強く…そして、悲しげだった。

ボクも、いま、同じ目をしているのだろう、か…。

陽は沈み、闇が急速に、その濃さを増していた。
彼が、ゆっくりと川岸へと戻ってくる。
ボクは、腕を上げ彼に、手を差し伸ばした。

終

※この作品は、フィクションです。実在の場所・人物・団体とは関係ありません。
※作品を書くにあたり、平成２４年度の『国土交通省　関東地区整備局：高い放射線量の確認について　多摩川河川敷のゴミより高い放射線量が確認されました。』及び『環境省：公共用水域放射性物質モニタリング調査結果（まとめ）』のデータを参考にさせていただきました。
※作中に登場する線量計は『ポニー工業株式会社：ＧＰＳ連動型空間線量率自動記録システム（Hot　Spot　Finder）』を参考にさせていただきました。